

# たぬまきアクア

①KCアUAとその周辺に広がる  
創造活動の現在形

02

京都市立芸術大学ギャラリー @KCアUA

ZINE



# still moving

## We are still moving

京都市立芸術大学は数年後に、JR 京都駅の東側エリアである「崇仁地域」への移転を予定しています。2015年3月7日 - 5月10日には、国内外のアーティストが集い、この地域へ移動していく「第一歩」として、展覧会「still moving」<sup>(1)</sup>を実施。またサテライト会場となった京都市立芸術大学ギャラリー@KCUAでは「still moving @KCUA」<sup>(2)</sup>と題して、京都を拠点に国内外で活躍をみせる若い世代のアーティスト10名を紹介しました。

上述の展覧会が閉幕した後も、この地域が国際都市・京都の文化芸術の新たな拠点となることを目指し、本号の表紙で紹介した山本麻紀子とヒスロムによるワークショップ「親子ふれあいアート教室」や、学生の展示<sup>(3)</sup>など、さまざまな移転プレ事業を継続的に展開しています。



1



1



2



2

1

出展作家：石原友明崇仁ゼミ、井上明彦+二瓶晃、小山田徹、かげうつつ展実行委員会（企画：林田新、参加アーティスト：小田原のどか、高橋耕平、水木壘）、杉山雅之、高橋悟、田中和人+増本泰斗、谷中佑輔、久門剛史、ヘフナー/ザックス、RAD  
-Research for Architectural Domain-  
会期：2015年3月7日（土） - 5月10日（日）  
会場：元崇仁小学校/崇仁地域周辺

2

出展作家：青木陵子、伊藤存、伊東宣明、金氏徹平、清田泰寛、田中和人、唐仁原希、花岡伸宏、水田寛、森下明音、山本麻紀子  
会期：2015年3月7日（土） - 5月10日（日）  
会場：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

3

京都市立芸術大学の在校生・卒業生有志による展覧会「Open Diagram」  
会期：2016年2月10日（水） - 21日（日）  
会場：元崇仁小学校  
主催：京都市立芸術大学  
協力：京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

# About "still moving — on the terrace"

プロジェクトメンバー：井上明彦、金氏徹平、小山田徹、杉山雅之、高橋悟、  
長坂常（スキーマ建築計画）+イナ&マツ、坂東幸輔、森野彰人  
会期：2016年4月16日（土）-5月29日（日）  
会場：京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA / 崇仁地域周辺

2016年春、京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA をメイン会場として「still moving - on the terrace」を開催。本企画では、本学関係者を中心としたプロジェクトメンバーが、移転後の本学が果たす役割を想定しながら、ギャラリー @KCUA 内のあらゆる場所で、そして時には崇仁地域にて、日々その形を変化させつつ、新しい生き方・働き方・コミュニケーションの仕方を模索していきます。それは、一般社会ではリスクがあると思われることでも、失敗を怖れずに取り組むことができる大学だからこそ可能な、日常的な価値観の外側に軸足を置いた創造的実験となりました。「still moving」は、未来の芸術大学の姿を思い描きながら、オルタナティブの新しいかたちを求め、今後も挑戦を続けていきます。

京都芸大の移転のコンセプトでもある *on the terrace* 的活動の精神を見ていただこうと考えた。その結果、会場である @KCUA というギャラリー内の施設を誤用しもう一つの @KCUA を感じとってもらおうと考え各所に新たな用途を振り分けました。どんな誤用かは見てのお楽しみ。

—長坂常（本展会場構成/スキーマ建築計画）



# Documentation of “still moving – on the terrace”

still moving – on the terrace では、いわゆる展示場所とプライベートスペースが逆転。搬入作業は通常のギャラリースペースだけに留まらず、オフィスやバックヤードまで移動する大規模なものに。その一部をここでご紹介します！

1 「stock @KCUA」と題された2Fのギャラリースペース@KCUA 2では、普段倉庫に納められていたストックの一部を配置(ディスプレイ?)。2010年にオープンした@KCUAの6年間のアーカイブが可視化されます。



08



4 搬入期間中は大型プリンターがフル稼働。崇仁地域の祭囃子の楽譜が壁紙となって出てきています。出力したロールは約80メートルにも及びました。

09



2 金氏徹平先生(彫刻専攻、美術家)とプロジェクト参加学生チームによるスペースは、1Fのオフィススペースとバックヤード。まず片付ける事から始める搬入作業となりました。金氏先生筆頭に片付けながら展示のプランがどんどん決まっていきます。



3 元崇仁小学校の二宮金次郎像から型取りされた3体の金次郎が来館。小学校から堀川音楽高校へ、10年後に実現する移転の練習なのでしょうか。搬入中から存在感を醸し出しながら、セッティングの時間を静かに待ってられました。

5 お囃子の壁紙が@KCUAのエントランスホールを埋め尽くしはじめました。このお囃子を奏でながら崇仁地域を船鉾・曳山が練り歩く崇仁春祭りは2016年5月8日に行われました。京都市立芸術大学の教員・学生は担ぎ手として、音楽学科の学生は囃子方として参加しました。



7 搬入と並行して、2016年3月に刊行された第一弾 still movingのカタログも発送されました。2015年3月に始まった崇仁地域と京都市立芸術大学の試行はこれからも続いていきます。(カタログご希望の方は@KCUAまでお問い合わせください)



6 大学移転準備室を整える坂東幸輔先生(環境デザイン専攻、建築家)と小山田徹先生(彫刻専攻、美術家)、杉山雅之先生(構想設計専攻、美術家)。実際に4月22日には大学の将来構想に関する会議がここで行われました。



10

11

8 オフィスの大移動が完了! 展示会の期間、スタッフは慣れない配置と慣れない目線の中でごちなく作業をすることに……。この場所に慣れた頃、また元の場所に戻ります。



9 @KCUAに3台ある可動壁の中は、プロジェクトメンバー長坂常さんからの指令によってホテルとなることに。ギャラリースペースは木作業場と化しています。

## 徳山拓一「キュレトリアル・リサーチ 2015 アメリカ編」

ぼくは@KCUAの学芸員だった2015年6月から11月までの半年間休職して、欧米へリサーチに行きました。リサーチの目的は、昨今のアートシーンで話題になっているソーシャリーエンゲージドアートと新しいコンセプチュアル・アート、海外のシーンで活躍する若手作家の調査でした。ここでは、半年間のリサーチの全てを書くには文字数が限られているので、リサーチの後半で行ったニューヨークとロサンゼルスで出会った人達のことを書いています。

## 徳山拓一 Tokuyama Hirokazu

1980年静岡県生まれ。2004年ニューヨーク市立大学ハンター・カレッジ芸術学部卒業、2008年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻油画修了。2012年から2015年まで京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA学芸員。2016年4月より森美術館アソシエイト・キュレーター。

主な展覧会企画に、植松永次個展「兎のみた空」(2016)、グイド・ヴァン・デル・ウェルヴェ個展「無為の境地」(2016)、奥村雄樹個展「な」(2016)、「The Hundred Steps」展(2015)、アピチャッポン・ウィーラセタクン個展「PHOTOPHOBIA」(2014)、鶴田憲次個展「SERENDIPITY」(2014)、「京芸 transmit program #04 KYOTO STUDIO」(2013)など。平成27年度京都市芸術文化特別奨励者。

## HYON GYON

ニューヨーク。JFK空港に着くとそのままタクシーに乗ってヒョンギョンのスタジオに行った。ヒョンギョンは、韓国出身のアーティストで大学院から京都市立芸術大学に留学、そのまま博士後期課程まで修了して京都で活動していたけれど、2年ほど前に活動の拠点をニューヨークに移している。ニューヨークにはアーティストになろうと本当に沢山の人が集ってくるけれど、ヒョンギョンはそこで見事に開花して、所属ギャラリーも決まり、オークションでも高値<sup>(\*)</sup>で作品が取引されている。これは非常に稀なサクセスストーリー。

ヒョンギョンのスタジオはマンハッタンハーレムにあった。廃墟になった商業施設の1階の巨大なスペース全体が制作場所になっていて、この場所は次のリースが決まるまでの期間限定でビルのオーナーが貸してくれて、折角なので最後にオープンスタジオをして、そこで制作した作品を見せる1週間限定の展覧会が開催されていた。ぼくがニューヨークに着いた日が最終日だったので、空港から急いで向かった。

会場に入ると、まず横幅が15メートルく



て、ストロークも大きくなり、スピード感も増していた。面相筆をつかって繊細なラインを重ねて髪の毛などを描いていた京都の頃の作品にも、迫力やスピード感はもちろんあったけれど、それに抽象表現主義のようなダイナミックさが加わったような感じだった。ニューヨークの影響なのだろう。

個人的な見解になるけれど、日本の作家が海外に活動の拠点を移す一番のポイントは、このようにスケール感を広げることができることだと思う。これは海外で生活をするときと単純に建物や道路、車が大きかったり、食べ物が大きかったり、普段の生活の中で感覚を通して享受される様々な事柄から無意識に影響を受けるものだと思う。もちろん、これはサイズに限ったことだけでなく、味覚やコミュニケーション、常識など、広い意味での異文化交流を通じて、自分の殻がゆっくりと壊れていくことも意味している。そのうちに作品の発想にも影響が出てくるものだと思う。

(現代美術に限って言えば)いまのグローバルスタンダードは欧米なので、作家にとって海外のスケール感を内面化することは、国際的に活躍するためには必須なことなのだと改めて思った。ヒョンギョンの作品の喜ばしい変化をみて、そんなことを考えた。

## CHRISTOPHER Y. LEW

ニューヨークでは、アーティストのスタジオビジット、ギャラリーや美術館訪問などで毎日忙しかついていた。リサーチの前半で行ったヨーロッパで痛感したのは、アーティストもキュレーターもみんな忙しいので、誰かの紹介でないとアポを取るのが難しいということだ。ニューヨークでは、面白いと思ったアーティストやキュレーターとのインタビューの最後に、次に会うべきキュレーターやアーティストを、その場で直接紹介してもらって「わらしべ長者作戦」をやったので、スムーズに興味深い人達に会うことができた。

今回会ったキュレーターの中で一番興味を惹かれたのは、ホイットニー美術館のアシエイト・キュレーターのクリストファー・ルー (Christopher Y. Lew)。スーツにモヒカンというなんとでもバンクで素敵なキュレーターだ。2014年にホイットニーに来る前は、MoMA PS1のアシスタント・キュレーターだった。ホイットニー美術館でクリスと会った時、彼が手がけた2つの展示 (Rachel Rose と Jared Madere のそれぞれの個展) が開催されていた。小企画とはいえ、大掛かりなインスタレーションもあり、綿密なリサー

チに基づいた展示構成となっていて充実した展示だった。クリスとは同年代ということもあり、問題意識や美的感覚に共感するところがあり話が盛り上がった。ニューヨークで活動する若手作家をよく知っている (もちろんヒョンギョンの作品もすでに知っていた!) のと同時にアジアや日本の作家にも詳しく、その後会った若手作家達からの信望も厚く、ローカルな同時代性と国際的な感覚を持ち合わせていた。それから少し経って、クリスが2017年に開催されるホイットニービエンナーレ (\*2) のキュレーターに任命されたというニュースを聞いた。彼の知識と感覚で、いまのアメリカ現代美術をどのように捉えるのか、楽しみでしかたない。

## CHIN'S PUSH

ニューヨークで会ったロサンゼルスベースに活動しているアーティスト、リディア・グレン・マーリー (Lydia Glenn-Murray) も面白かった。彼女とは友達が開いてくれたパーティーで出会った。普段はロサンゼルスで Chin's Push というアーティスト・ラン・スペースをやっている。若干25歳のリ



14



15

ディアは、UCLAの学生だった頃に毎週イベントを企画していたことがきっかけでスペースを始め、年間50以上の展覧会やイベントを開催しているという。イベントは料理教室から抽象的なパフォーマンス、作品展示は陶芸などの生活雑貨からハードエッジなコンセプトチュアル・アートまで、とてつもなく幅広いジャンルのものを紹介している。

彼女と話していて興味深かったのは、作品の価値に対しての考え方だった。Chin's Push は非営利団体なので利益を出すことを目的としていないけれど、アートシーンの中での作品の価値付けに対して非常に批判的で、作品の適正な価格 (価値) を見出すことに様々なポイントからアプローチしている。



自分のスペースは「ノンコマース・ギャラリーの中にあるコマース・ギャラリーの中にあるミュージアムショップみたいなもの」と言う。著名作家の作品を安価で売ったり、若手の無名作家の作品を高値で売ったこともある。既存のアートマーケットの価格とは別のところにあり、作品に本質的に見合った価格を探っている。同時に、「概念的にも、戦略的にもなり過ぎないようにもしている。基本的には直感的で、楽しいと思ったことを実行しているだけ」とも言う。実験的なスペースだけれど、多面的な活動や緩やかな批評性など、アーティスト・ラン・スペースの運営姿勢がとても新鮮で、これからも注目していきたい。

## ART AND PRACTICE

ロサンゼルス。ここで一番行ってみたかった場所が Art and Practice <sup>(※3)</sup>。これは、画家でコンセプチュアル・アーティストのマーク・ブラッドフォード (Mark Bradford) が始めたプロジェクトスペースで、ロサンゼルスの中でも治安が悪く、低所得者が多く住む地域であるレイマート・パークに、ギャラリーとアーティスト・イン・レジデンスの施設、それからコンピュータースキルを学べる子供向けの学習塾を併設するスペースだ。生きる術 (コンピュータースキル) を無償提供する教育基盤 (educational platform) を作り、そこで美術教育も実施することで、ひいては社会における芸術の文化的価値への理解を促すことを目的としている。2015年まではマーク・ブラッドフォードが絵画作品を売ったお金でこのプロジェクトを運営していたが、2016年からは UCLA の付属美術館である Hammer Museum も共同運営・経営に参加した。実際に行ってみると、周辺地域は確かに治安が悪そうだった (実際に建物の写真を撮っていたら酔っ払いに絡まれた)。行ったのが土曜日だったので、学習塾には子供たちが来ておらず閑散としていてがっかりした



が、ギャラリーの展示は美術館レベルの質の高いもので一見の価値があった。ギャラリーには、普段は学習塾に来ているのだろう黒人の子供がいて、裕福そうなコレクター風の白人のカップルと作品の話をしていて。ギャラリーの外にでると、ぼくの乗っていたレンタカー (日産車) の前に、男の子の自転車、その隣にカップルが乗って来たであろう最新型

のジャガーが止まっていた。彼らはこのスペースがなければ、この地域に来ることはなかっただろう。その光景は様々な問題を示唆していて、いろいろな批判も考えられるけれど、この組み合わせの交流を、何か新しい事が起こりうる可能性を秘めているものとして、ぼくはポジティブに受け止めた。Art and Practice がなければ、そもそも起こり

えなかったことの一つなのだから。

マーク・ブラッドフォードの素晴らしさは、画家であることと社会活動家であることを、一人の作家の作品として成立させていることだと思う。アートマーケットに批判的になるだけではなく、そのシステムの中にいながらも、作品とは関係のない社会活動を積極的に実践している。しかも、その矛盾は、結果的に彼をアーティストとして特別な存在にし、アートシーンの中で評価をより高いものにしていく。否定するだけでなく、悪い状況を受け入れながらポジティブな姿勢を貫き、既存のシステムのなかに自分の価値を見出していることに、改めて感銘を受けた。

### リサーチを終えて

現代の複雑化した高度資本主義社会では、だれもが善にもなり、悪にもなる。多くの人は直接的にしろ間接的にしろグローバルな経済活動に関与している限り、世界の誰かを搾取しているという意味では、善悪で言えばグレーな存在なのかもしれない。アートマーケットが強大な影響力をもつ欧米のアートワールドでも同じことがいえるだろう。例え

ば、欧米の美術館の理事や寄付者の中には、悪名高いヘッジファンドや戦争ビジネスで利益を上げていた人物が多く存在する。そこに収蔵、展示されている作品とは一切関係ないが、それが素晴らし美術館の運営を支えているのというのが現状だ。

今回紹介したアーティストやキュレーター達は、そんな現実に対峙しながらも、アートを手段として自分の理想を実現しようと、実験的かつ批評的に行動していた。そこに共通するのは強靱なポジティブさだった。「とりあえず、問題があるのは当たり前で、上手くいかないのなんて当たり前だから、とにかく始めてみよう」。そんな姿勢が、知識、行動力、批評精神と止むことのないクリエイティビティに裏付けされていた。

先行きが不安で停滞した雰囲気立ち込める現代だからこそ、そんな彼らは素晴らしくて、すごく重要で、ぼくもこれからの10年くらいはそうでありたいと強く思った。

(2016.3)

※1 ニューヨークのオークションハウス、Christie's で2014年3月18日に開催された「Japanese and Korean Art」では、《R.I.P.》(2010, acrylic and aluminum leaf on panel, 601.5 × 301.5 cm) が \$75,000 (約8,000,000円)、Sotheby's で2015年11月12日に開催されたオークションでは《I WAS BROKEN》(2015, acrylic, cotton doll and gold leaf on canvas, 193 × 152 cm) が \$62,500 (約6,700,000円) で落札された。

※2 ホイットニー・ビエンナーレは、2年に一度、ホイットニー美術館で開催される、若手作家を中心としたアメリカ現代美術にフォーカスした展覧会。1932年から毎年開催され、1973年以降に2年に一度の開催となった。現代美術において、最も重要な展覧会の一つとされ、現代美術の流れを作るとされている。過去には、ジョージア・オキーフ、ジャクソン・ポロック、ジェフ・クーンズなどの重要な作家を第一線に押し出したことで知られている。2017年春に開催される予定のホイットニー・ビエンナーレ2017は、クリストファー・ルーとミア・ロックの若手二人が共同キュレーションを行う。

※3 <http://artandpractice.org/> マーク・ブラッドフォードが、2017年のヴェニス・ビエンナーレのアメリカ館の代表に選出されたことが発表された。

ア ク ア  
SCHEDULE @KCUA [2016.4-2017.3]

4月 APR.

5月 MAY

6月 JUN.

7月 JUL.

8月 AUG.

9月 SEP.

10月 OCT.

11月 NOV.

12月 DEC.

1月 JAN.

2月 FEB.

3月 MAR.

4/16 (土) - 5/29 (日)

still moving - on the terrace

崇仁地域への京都市立芸術大学移転計画を契機にスタートした still moving 第2弾企画。誤用を切り口に新しいオルタナティブの形を探します。



Photo: Koroda Takeru

6/11 (土) - 6/17 (金)

エミリー・ペドロン個展「unfired」

Photo: Koroda Takeru



6/11 (土) - 7/31 (日)

植松永次個展「兎のみた空」

真摯に素材と向き合う姿勢から生み出される、特定の様式にとられない生活工芸から具象・抽象オブジェやインスタレーション。本展ではインスタレーション作品を中心に、新作を発表予定です。

8/4 (木) - 8/14 (日)

芸術資料館収蔵品展  
「ARTであしあと7」

8/4 (木) - 8/21 (日)

黒宮菜菜個展「移ろう際」

8/20 (土) - 9/4 (日)

「通りぬけフープ」

8/30 (火) - 9/19 (月・祝)

京都市立芸術大学芸術学研究室  
による総合選抜展

Colors of KCUA 2016

「ニューバランスはあらわれた」

関連展覧会「NEW LIFESTYLE」(仮) : 9/10 (土) - 10/2 (日)

パフォーマンス : 10/1 (土)

Nuit Blanche Kyoto 2016 @KCUA

9/10 (土) - 9/19 (月・祝)

サイレントアクア 2016

10/22 (土) - 11/27 (日)

マーティン・クリード個展 (タイトル未定)

ターナー賞を2001年に受賞し、国際的に活躍するロンドン在住のアーティスト、マーティン・クリードの関西初個展。本企画は、「音楽や演劇の作品を作るように美術作品を作っている」というクリードの活動を、展覧会やパフォーマンスなどを通して多面的に紹介し、これからの美術表現の可能性を問う試みとなります。



Work No. 1020 (Ballet) | Photo: Hugo Glendinning

12/1 (木) - 12/11 (日)

京都市立芸術大学第27回留学生展

© Kawai + Okamura



12/17 (土) - 2017/1/22 (日)

カワイオカムラ「ムード・ホール」

おかわひろき おかいたくみ  
岡村寛生と川合匠による映像ユニット、カワイオカムラ (Kawai + Okamura) の9年ぶりの個展。過去作から最新プロジェクトまでを一挙公開!

1/28 (土) - 2/12 (日) (予定)

未来の途中プロジェクト (タイトル未定)

1/28 (土) - 2/12 (日) (予定)

「道具考」(仮)

2/18 (土) - 3/5 (日) (予定)

「80年代再考のための  
アーカイバル・プラクティス」(仮)

2/18 (土) - 3/5 (日) (予定)

鳥居本顕史個展

「1より小さく0より大きい1」(仮)

3/11 (土) - 3/26 (日)

ひろいのぶこ

(本学染織専攻教授)

退任記念展

## 常設展示について相談ひとつ 福永信

私は、美術館の常設展示を紹介する原稿を毎月書いている者です。こんにちは。その原稿は「福永信の常設大陸」というタイトルなのですが、共同通信配信の記事なのです。ええ、そうなんです。今年44歳、情熱を注いでがんばっておるのですが、今日はそのことでお若いみなさんに相談があるのです。西日本限定のレアな配信なので、関西や中国四国九州地方等の美術館を訪れるのですけれども、これが意外とむずかしいのですよね。ええ、常設展示というのが、見つけにくいのです。つまり、常設展示はどこにあるのでしょうか。それが今日の相談なんです。はい。たしか

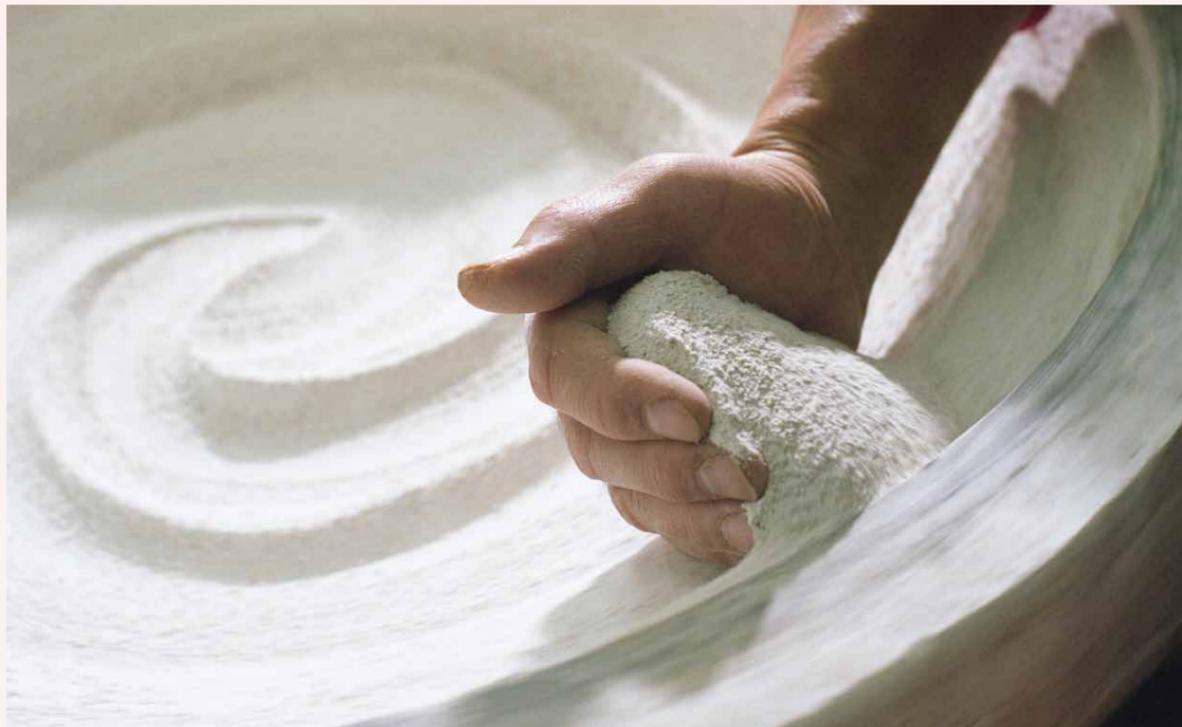
に、多くの美術館に常設展示のスペースはあります。あるのですが、展示替えが前提になっているじゃないスカ。「常設」とは言えないでしょう、そういうのは。正直、困ります。しかも、最近の傾向なんですか、コレクション展という名で企画展とそう変わらぬ展示が、ごくろうさまなことに、なされる場合もあります。え、美術館の片隅ですか。そこに目をやっごらんさないと言うのですか。そこに常設展示があるのですか。どれどれ。いやあ、しかし、美術館の片隅、すごくじめっとしているというか、人がいない。うわなんか踏んだよ。ねえ、こんなところには地味な野外彫刻しかありませんが……ああ、なるほど、野外彫刻は地面に突き刺さっておりまして、重たいですから、動かさせません。晴れの日も雨の日も、毎日、展示されています。つまり、これは、常設展示だ、と。でも増えていくのでしょうか？ 毎年、購入するんじゃないですか、新しい作品を。え、購入予算がない。それはとても面白い。いや、予算がないことが面白いと言ったわけではないのです。そうではなくて、開館当時の空気が、ほら、なんて言うのかな、「がんばろうじゃないか」とかそんな心意気がこの野外彫刻の設置場所の周辺には……ええ、はい、こうして、誰ひとりい

ない美術館の片隅で、耳を澄ましていると、「これからおれらやるよ」、そんな20年前の威勢のいい声が聞こえてきそうです。「私達、やるわよ」という30年前の初々しい声が聞こえてくるようです。アーティストの声なんか掻き消えてしまいそうです。それでいいんです。美術館にはいつも「現在」が漂っている。物故作家であったとしても、「現在」に調律して展示するわけです。なぜ今、この作家なのか。学芸員はいつもそんなことを考えているんだと思うんです。よく生誕百何十年とかあるでしょう。それは現代に合わせてその物故作家をチューニングしているわけですね。現在、その作家がどう見えるのか、現代においてその作品はどのように映るのか、美術館の腕の見せどころですよ。今、生きている人間達が展覧会を作り、今、生きている人間達に見てもらうわけです。展示替えをする「常設展示」にしても、コレクション展という名の「常設展示」にしても、やはり、どちらも「現在」に照準を合わせている。でも美術館には、過去の時間も漂っていてほしい。物故作家だけでなく、物故学芸員も、物故観客も、つまり、もうこの世には「いない」人間が、混ざってほしい。もし、ほとんどの常設展示、飾りっぱなしの常設展示があるならば、

それを設置した学芸員、見た観客、それを維持してきた学芸員、その維持されてきた展示を見た観客、そんないくつもの時間の重なった「視線」が、展示場所に保存されるはず。「このインスタレーションを見てきた」人間達の視線が何十年分も保存されているような、作品が生き続けるだけでなく、いつまでも人の視線が生き続ける場所に、美術館がなければいい。中途半端な、企画展めいた常設展示は今すぐやめて、ほんとの常設展示、飾りっぱなしの展示にしてください。ぜひそうなさい。若い人に相談と言っておきながらこうして説教を堂々と書く。それが中年ということの証左でして、今後ともよろしく願います。

### 福永信 Fukunaga Shin

1972年生まれ。小説家。『アクロバット前夜』(2001/新装版『アクロバット前夜90°』2009)、『あっぷあっぷ』(2004/共著)『コップとコッペパンとペン』(2007)、『星座から見た地球』(2010)、『————』(2011)、『こんにちは美術』(2012/編著)、『三姉妹とその友達』(2013)、『星座と文学』(2014)。REALKYOTOでブログを連載中。



## vol. 2 植松永次 | 伊賀のスタジオ

ギャラリー @KCUA が様々なアーティストのスタジオを訪問し、スタジオの様子や今気になっている事をお聞きするコーナー「STUDIO VISIT @KCUA」。カワイオカムラに続く第2回は三重県伊賀に自宅兼仕事場を構える植松永次さん。土と火に向き合い、その驚くべき自然の造形を取り出し続ける氏。幅広い交流の中、後進の世代に多大な影響を与える植松さんの仕事場を訪ねました。

インタビュー内でも語られた新作を紹介する、植松さんの個展「兎のみた空」は6月11日からです。ぜひインタビューとあわせてご覧ください。

### — アトリエでの一日の過ごし方は？

朝9時過ぎから仕事場に入って、前の日のものがほとんどそのまま放ってあるのでちょっと片付けをしながら、次の仕事に取りかかります。ぼくの仕事は区切りがなくずっと流れているような感じなので、そのまま正午くらいまで作業します。お昼を食べた後は15分から20分くらいの昼寝をします。その後は、大体18時30分頃まで仕事場にいます。



Interview: 編集部  
Photos: Koroda Takeru

ここは自宅兼仕事場なので、ちょこちょこと気が付いたらそこら辺の小枝を拾ってみたり、燃やしてみたり、どっか片付けたり。家にいる時は年中仕事のようなですね。

仕事をしていることが仕事じゃないんです。目に入るものに感じて、ちょこちょこと動くことが好きなので、全然苦にはならない。仕事してる！っていう雰囲気ではないんですけど（笑）。用事がある外に出ることや、人

と会ったり来てくれたり、見に行ったり、外に出かける時が休みという感覚です。

### — 今回は陶芸の森でも制作されたかといいましたが

前回お世話になったのは、実はもう20年近く前なんです。それ以来、見に行ったり人と会うために幾度も陶芸の森を訪れていますが、仕事したのは20年ぶりです。@KCUAか

ら展示会のお話をいただいた事がきっかけです。仕事内容は普段と変わりませんが、ここなら大きな作品も作れるし、普段と違った雰囲気の中で仕事ができるので、新しい発見もあるかなと思ってね。

今回は12月の一ヶ月間が作業期間で、2月に窯詰めと、窯出し、その後の焼成に10日近く通っていました。今回は行ってすぐに、陶芸の森でいろんな人が残っていた処分される土にすごく感じるものがあったんです。いろんな人が使った少しずつ色や質感が

異なる土の塊をそのままであったり少し削ってみたり、磨いたり、僅かに手を加えるだけで、いろんな表情が出てすごく面白いのが出来るんです。土からなにか感じるものがあるんですよ。

これを今回は@KCUA 1で展示しようと考えています。今焼き上がったものだけでなく、もう一度4月に陶芸の森に行く予定なので、今度は自分で選んだ土でも(笑)やってみるつもりです。

#### — この土地を選んだ理由は？

まず、火を焚いてもいいこと。そして、地面よりも高いところ、子供が学校に通える距離とか日当たりなどを考えてこの場所を選んだかな。

知り合いの大工さんとその仲間で建てられました。当時は大工さんも20代で、僕も33か34だったかな。その大工さんの2作目くらいの家です。この場所に生い茂っていた木を切って、それも家に使いました。



#### — 特に気に入っている場所はどこですか？

アトリエというより、この土地の空気感が気に入っています。冬は葉っぱが落ちて向こうが見えますけど、春から夏になると木に覆われて周りが見えなくなり、ひとつのポカーンと抜けた空間ができるんです。

木は植えたわけではなく、10年くらい草刈りもしてなかったら自然に生えてきました。最初にこの場所を訪れた時は、上がってくる道もなく、小さな木と草が茂って、草を分け入って入るような山のような場所でした。

— 特に入っている場所はどこですか？  
ここだけで人に会わずにふらふらできることも気に入っています。アトリエで物作ったり土触ったりするだけじゃなくって、草刈ったり木切ったり、色んな動きができるので、それがちょうどいい感じですね。

#### — ここに来る前と来た後の変化は？

ここに来る前は窯を持っていませんでした。信楽の大きな工場で勤めて、その工場の中にある家に住んでいました。そこでは大きなものも作れて、大きな窯や、野焼き出来るよう

な場所、どろどろのものでも芯から乾かせるようなすごい乾燥室がありました。当時もちろん器物は作ってなかったで、作品の発表と言ったら大きな土の塊のようなヘンテコなものばかり作っていました。

引越して半年ぐらいはずーっと仕事場に籠ってたかな。でも、売りに行かないし、いわゆる陶芸をやろうと思っていなかったで、売れるものは作れない(笑)。

独立するつもりで仕事も辞めてここに引越したんだけど。あんまり作らない値段

もつけないから生活ができない……だから、食えないわけだからまた近くの陶器屋さんに8年間勤めに出ていました。

発表したのはここに来て3年くらいしてからですね。京都のギャラリーマロニエで初めて個展をしました。以前は作ったものに値段をつけることなく発表するだけで、初個展の時も見てもらえたらいいかと思って値段をつけなかった。

その後も勤めながら色々な場所で年に一回発表していたら、少しずつ「展覧会しません

か？」っていう声が掛かってきて。そうしたらもう勤めながらは出来ない状態にまで声が掛かったので、じゃあいっぺん勤めをやめようと思って。それまでに8年かかったね。勤めを辞めた年は6回個展したかな。陶芸家になりたいとも、器を作りたいとも思っていなかったので、土を見てもらえれば良いという最初の気持ちがずっと続いていましたね。

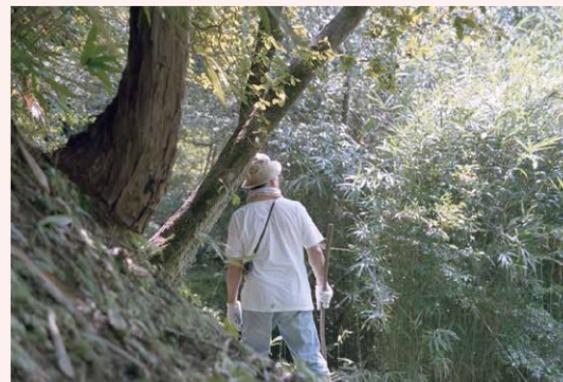
—— 現代美術家にはなろうと思わなかったのでしょうか？

う〜ん。陶芸家とか、現代アーティストとか、そういう肩書きとかの意識はなかったね。私の仕事は陶芸家の人から見たら、「何してるんや」となるし、現代アートをやってる人から見たら「陶芸やろ」となる。見に来た人も「何してんの？」という感じ。いまだに陶芸家ともアーティストとも思っていないですね。

そうですね、表現以前というか、土に向かっていたいという気持ちが強いんですね。そして、土から見えてくるもの、感じるものを多くの人と共有できればいいですね。



26



—— 美術を学ぶ場所についてどうお考えですか？

どこの芸大にも言えることですが、芸術というよりも技術であり作品を作る事にウェイトが置かれているように思いますが、どうでしょうか。

先生は自分の制作する姿という考えを生徒に背中で見せられるといいのと思いますね。理想ですかね。そして学ぶ場がただ楽しい場所ではなく、それぞれが自然や社会、様々な事象をどう捉え、アート以前に何に感じ、何を考えているか、そういう事が大事なんじゃないかと思いますね。

27

#### 植松永次 Uematsu Eiji

1949年神戸に生まれる。1972年土の質を確かめる事からレリーフを創り、その後東京で焼物の仕事を始める。1975年より信楽に入り製陶工場勤務の傍ら自らの制作を続ける。1982年、伊賀市丸柱に住居と仕事場を移し、薪と灯油併用の窯を築き野焼きも含め作品の中は広がる。1996年滋賀県立陶芸の森に招待され制作。1980年代より個展・グループ展多数。

植松永次個展「兎のみた空」

2016年6月11日(土) - 7月31日(日)

11:00 - 19:00 (最終入場 18:30 まで、月曜休館)

\*7/18(月)は開館、翌7/19(火)に休館

京都市立芸術大学  
Kyoto City University of Arts

@KCUA



京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA

住所：京都市中京区押小路町 238-1

地下鉄「二条城前」駅（2番出口）南東へ徒歩約3分

「堀川御池」バス下車すぐ

TEL: 075-253-1509

<http://gallery.kcuu.ac.jp/>

編集：西谷枝里子（リレーリレー）、藤田瑞穂、永田絵里

発行：2016年5月31日

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA ©2016

